



Title	＜紹介＞福田安典ほか編 『都賀庭鐘・伊丹椿園集』
Author(s)	石原, 隆好
Citation	語文. 2001, 77, p. 52-52
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68992
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

紹介

福田安典ほか編『都賀庭鐘・伊丹椿園集』

石原隆好

国書刊行会「江戸怪異綺想文芸大系」の第二巻。本シリーズは、先にと社から出た「叢書江戸文庫」の統編的な性格を持つ。すなわち活字化される事の少ない作品を中心に善本を選定し、或いは作者別或いはジャンル別に編集し、研究に耐える本文を提供するものである。

本書においても、随所にその意気込みが看取される。この巻に収める二人の作者はいずれも、所謂前期読本作家として文学史に記述される人物である。だが従来の扱いでは、「読本の祖」庭鐘の場合、文学全集に翻刻されるのは専ら『英草紙』の類のみであつたし、また伊丹の酒蔵家の養子であつた椿園の場合、『随筆百花苑』に『椿園雑話』が収録されたのみであつた。どちらもその全体像の総合的把握には至らなかつたわけである。

本書では「都賀庭鐘篇」として『莠句冊』『義経磐石伝』『四鳴蟬』『呉服文織時代三國志』『過目抄』の五編を収める。夙に山口剛が日本名著全集『怪談名作集』に収める庭鐘作四編からは、『莠句冊』のみを採り、謡曲・浄瑠璃の漢訳である『四鳴蟬』や、『三國志演義』の浄瑠璃化である『時代三國志』を取り合わせ、それに庭鐘自筆の読書筆記録『過目抄』の翻刻を配して（抄出記事の、原本における相当箇所が注記されている）、読本作者としての庭鐘を多面から考察することを読者に要請する選択となっている。

「伊丹椿園篇」に収めるのは『翁草』『唐錦』『深山草』『椿園雑話』

『絵本弓張月』の五編である。最初期の『翁草』（安永七年刊）から、『深山草』（天明二年刊）まで、椿園の著述活動を見わたすことが出来る。かつ前述『椿園雑話』は、『随筆百花苑』の底本である中村幸彦氏蔵本に加え、刈谷市立図書館村上文庫蔵本を以て校合されている。

編者福田氏には既に「戸田旭山小伝——大坂の椿園・庭鐘・源内——」という論文がある（『近世文藝』70）。伊丹椿園という「一人の作家の誕生契機」について、大坂の本草家・戸田旭山の薬品会という場における庭鐘との邂逅を、その一つの要因として想定した立論だが、一人椿園という作者の出発点に視点は限られていない。所謂宝暦明和期における大坂騒壇の状況の、ナマの空氣の再現にまで問題は及ぶ。本書はまさに、その問題意識に照応する形で編まれたものである。この一書によつて我々は、後期読本の盛況から邇及的に見られがちな二人の作者をより立体的に位置づける端緒を得たことになる。（稲田篤信氏・木越治氏と共編、国書刊行会、二〇〇一年五月刊、七七八頁、一三、〇〇〇円）

——本学大学院博士後期課程——